

大阪大学図書館報

Vol.27 No.3 Dec. 1993 (平成5年) 通巻112号

目次

- | | |
|--------------------------------|-----------|
| ○ 'Genetic' と 'Generic' | ○教官著作寄贈図書 |
| ○大阪大学蔵の演劇書 | ○会議 |
| ○第6回国立大学図書館協議会シンポジウム（西地区）に参加して | ○お知らせ |
| ○平成5年度 NACSIS-IR 地域講習会に参加して | ○日誌 |

'Genetic' と 'Generic'

中西康夫

研究社発行の「新英和大辞典」によれば、“genetic”には「遺伝学の、発生の、遺伝子の」などの比較的分かりやすい訳語が、“generic”には「属の、広く通じる、一般的な、同類の全体を表す、商法登録による保護を受けていない」などのわれわれには難解な訳語があてられている。いずれの訳語をとるかは別としても、“generic”は“specific”の反対の意味をもつ言葉として紹介されているが、われわれ普通の人間が生活する場においてこの言葉に出会うことはまずない。ただ米国での生活を経験した人はスーパーマーケットの天井からぶら下がっている看板に書かれた、この何とも分かりにくい言葉を見たことがあるかもしれない。そこには特別な製造会社名はないが、充分役に立つ商品が所狭しと並んでいる。日本でも最近「無印良品」として販売されている類のものである。

ところで、基礎的な生物学の教科書には、「全ての生物は細胞から出来ている」と書かれている。それに従えば細胞を生き物から取り出してプラスチックのお皿に入れ、それに色々な栄養物を加えて培養し、それらの性質を調べるのは至極当たり前のことである。ところが多くの細胞から出来ている私達の身体の中では必ずしもそれが正しいとは言えないのである。確かに細胞から出来ているが、それだけではなく細胞が作り出して細胞と細胞の間に蓄積した物質群があり、その海もまた生き物にとって大切なものと思われ始めているのである。ヒトにしろ他の動物にしろその体が出来上がっていく発生の時期には多彩な細胞群がこの物質の海を泳ぎ回っている。この物質の海とこの時期に形成されていく体内のさまざまな器官の形との関係を研究課題としている私にとって悩みは尽きない。そう簡単に細胞を生き物から取り出して培養するわけにはいかないからである。

ここで問題にしている海は、私達が知っている海のようにさらさらとしたものではなく、巨大分子で出来ているだけに粘度が高く、水を加えても容易には混ざらない。しかし海の潮流のように流れ、動いている可能性が高いのである。従って、ある場所に存在したと認識された分子があったとしても、それは次の瞬間には別の場所に流れているかもしれないのである。こう考えてしまうとある限られた狭い空間に存在する海は、原理的にはその性質の把握が困難であるとの結論に到達してしまう。しかし生き物の形とはそのような狭い空間の形の連続の結果である。

現在、生物学者の頭は自然を還元主義的に、もっと言えば「特定の分子」の働きとして理解するという方向に向いてしまっている。私もその例外ではない。生き物の、またその体に備わっているさまざまな器官の形を、それぞれ特殊な分子の機能の結果として捉えようとするのである。生物学の一分野である医学においてもこのことに何の変わりもない。ここに医療の抱える巨大な問題が隠されているのであろう。それはともかくとして、このような状態のことを“genetic”と呼ぶのであろうし、“specific”であることが要求されているのであろう。もう少し具体的に言えば、特定の遺伝子の産物である特定の物質が、生命現象の特定の時期と場所において特別な働きをする結果、正常な生物の発生、成熟、老化そして死が導かれるとするのである。つけ加えて言えば、研究者は自らが発見した物質にむやみに特別の名前をつけることが多く、そのため情報が混乱しがちである。

近年われわれは膨大な数の論文を掲載した多種多様な科学雑誌に取り囲まれて生活している。その中でも特に高い発行部数を誇る有名な雑誌の論文では、そのほとんどが遺伝子についてか、または遺伝学的手法を用いたものによって占められる場合がある。遺伝子のデータが特に必要でない投稿論文でも、現在の技術から考えれば遺伝子についてのデータを付け加えた方が読者にとって有益であるとの理由で、レフェリーから改善を要求されることもままあるのである。これだけの繁栄をもたらした分子生物学者の努力に敬意を表することにやぶさかではないが、事態は少し異常である。

先ほども述べたように、われわれは自分たちが研究対象としている物質が「特殊な、特定の」役割を果たしていることを提示する必要に迫られている。このための近道のひとつは遺伝子工学的手法の採用である。最近の遺伝子工学的技術の進歩は日進月歩で、この手法により、特定の遺伝子を破壊した、あるいは特定の遺伝子の発現を抑制したマウスが種々作り出されるようになってきた。その中には確かに予想されるような奇形の、または疾患をもつものもある一方で、予想よりきわめて軽微な影響しか受けられないもの、まったく何の影響も受けられないものが続々と出てきたのである。あえて言えば、このような結果を出してしまった研究者の悩みは想像以上であろう。

しかしこのような結果はさまざまな表現で説明される。例えば、染色体にある DNA の大半は実は使われていないようであるが、遺伝子の指令によって作り出されるタンパク質などの物質にも余計な、どうでもよいものが沢山あるのではないか、あるいは同じ機能をもっている別の物質をあらかじめ用意してある、いわゆる fail-safe のシステムが働いているのではないか、または現存する動物もまた進化の途上にあり、それなりの試行錯誤を繰り返しているのではないか等である。これらの説明は当たっているかもしれないが、しかし説明用語の域を出ない。

一方、これとは別に以前からグローバルな生物現象を“generic”に考察し続ける研究者もいるのである。これは簡単に言ってしまうと、「特定の」分子に「特定の」機能を担わせ、それらの高度に制御された分子機械のような共同作業を想定するのではなく、分子に「広く通じる」(“generic”)意味での、例えば単純な「接着性」を、またある高分子物質の水溶液ではその「粘度」を考慮の対象とするのである。このような場合、物性を問題にするのであって、分子の名前などはどうでもよいのである。そして「接着性」の異なる2種類の細胞の混合した状態からは細胞の動き

と同調して2つの組織が出現し、2つの異なる「粘度」を持つ高分子溶液を接触させると、重力や界面張力や拡散の影響下に相互の溶液内に思いがけない流れが発生する事実があり、この流れは細胞すら運搬できるほどのものである。このような“generic”な考えは、物理学者や物理化学者に広く検討された結果多くの実験例が示されており、むしろ生物学者のみがこれを無視し続けたきらいがある。つまり、生き物はこのような“generic”な現象に支えられてグローバルな体制を作り上げ、それを安定化させ、より詳細・確実にするために高度に分化した遺伝子システムが“genetic”に機能していると考えるのである。この考え方は特定の遺伝子操作によっても何の変化も起こらない現象をうまく説明出来る可能性がある。

先ほど私は、細胞の周りには海がありそれは流れているかもしれないと述べた。いや、海だけが流れるはずはないのである。そこにある細胞群はその流れに乗って動いていけるのである。発生生物学の大問題の一つに「神経冠細胞」と呼ばれる細胞群の大移動がある。これは、その細胞1個1個が自ら運動してある特定の場所に到達すると考えられてきた。確かに現在もそう考えられているが、今から10年以上も前に、アメリカの若い女性発生生物学者が細胞の代わりにプラスチックビーズを、正常なら細胞が動く経路に注入したところ、そのビーズは細胞と同じように移動したのを発見したのである。ビーズは生きてはいない。従って、細胞を含んだ海は明らかに流れているのである。この研究はかなり徹底的に行われ、その実験の信頼度は高い。しかし、その研究者自身現在はこの驚くべき結果をほとんど振り返れないのである。それほどまでに現在は“genetic”な世界である。

私が研究対象にしている唾液腺という唾液を作り、分泌する器官の形づくりの系でも事情は似ており、細胞を含む海は流れている。そこに細胞よりはるかに大きなビーズを埋め込めばそれは時間とともに移動するのである。またそこにある細胞はその流れの中にあるコラーゲンと呼ばれる繊維性の分子を引っ張って物理的な力を示すことが出来るが、同時に普通の生き物にはないシリコーンと呼ばれる高分子物質でも引っ張れるのである。この意味でやはり“generic”であるが、その流れと力が形づくりと関係していると私が学会で発表しても、“genetic”に考える人を別にすれば、すぐに「特定の」分子の話題である“genetic”に戻ってしまうのである。そのことを十分に理解させられない、また十分に理解できていない、理解できるだけの実験系を構築できない自らの非力を実感しつつも、“genetic”であることが、「具体的」であると直ちに認めるわけにはいかないのである。

それはともかく、図書館に集められた情報は広い意味で“genetic”であり、そこから“generic”なものを引き出すのが現代に生き、図書館を利用するわれわれの責任であろう。

(なかにし やすお 教養部生物学担当教授)

大阪大学蔵の演劇書

信 多 純 一

☆

おおさか
大坂と呼ばれていた江戸時代、この地に演劇の花が開いた。その代表的なものは竹本義太夫に始まる、人形浄瑠璃座竹本座の興隆である。義太夫節は浄瑠璃各流の殆どが衰亡していった中で、今

に至るも文楽として今や世界にも知られた芸能として脈打っている。

ついでに申せば、今は殆ど絶滅した観のある（一部その後裔が八王子・東京などに遺る）説経浄瑠璃が、大坂に誕生し、たちまち京・江戸に飛火して、太夫が招かれ江戸下りして活躍した。説経与七郎なる太夫が天王寺辺りで興行したのが始めである。この芸能の演目の中に、「をぐり」「かるかや」「しんとく丸」、そして「山椒太夫」などの名曲がある。歌舞伎においても、嵐三右衛門などの名優が京の坂田藤十郎に拮抗して競い合った。

そういう土地柄であるだけに、文学部国文科においてもこの種の資料の収集に、代々の教授達は配慮し努力されてきた。

初代教授小島吉雄氏は、文学部創設時に赴任されたが、忍頂寺文庫・笹野文庫という、今や到底集め得ない好資料をその在任中購入されている。

忍頂寺文庫とは、淡路の人忍頂寺務翁の収集された一大歌謡コレクションである。その内容は、小説類をも含むが大部分、近世演劇・遊里、さらに近世歌謡が主なる分野であって、『清元研究』などで知られる忍頂寺翁が多年にわたって収集された貴重文献として知られている。この歌謡書の中に浄瑠璃各派の正本類も含まれている。

笹野文庫は、国文学者笹野堅氏の収蔵書の中、特に近松を中心とした浄瑠璃本 170 点にのぼるコレクションで、近松・海音作品等元禄頃の稀本からなる全国有数の文庫である。笹野氏は幸若舞曲の研究者として聞こえているが、この方面の収書にも精力的に努められ、その上方劇書群が関東から将来されたのは好運であった。

これら二大コレクションを小島教授の尽力で収めることが出来たのであるが、その資金は当時まだ草創期であっただけに、教授が直接本部に交渉され、今村総長の理解の下、基本資料として認められ、購入されたものようである。

☆ ☆

収書には経済的裏付がともなう。小島教授の収集以後、大型のコレクション収集は殆ど見られなくなり、一点二点を研究室予算の中から捻出して加える程度の期間が長く続いた。

日米経済摩擦が漸く尖鋭化し、その解消の一助として、洋書の大型コレクション購入が認められるようになり、その余波が和書の分野にも一部及ぶに至る。

昭和 57 年度文部省大型コレクション収書計画に、教養部と文学部の協調で赤木文庫古浄瑠璃コレクションを申請したときは、その実現はかなり困難と思われた。何分価格が高額であり、予算額に持主の理解を得て近付けなくてはならず、不安のまま提出した。その後が大変で、文部省に説明に出かけたり、持主とその代理人の間を往復したり、その交渉の間に問題が多く殆ど諦めかけていたのであるが内示があり、破格の二年に分けての購入が認められたのである。しかし、申請額からさらに減額するよう指示があり、その後の入荷、支払完了まで決して平坦ではない日々が続いた。

こうして本学図書館の所有に帰した赤木文庫とはどういう性質のものか。信州塩尻の人横山重翁は個人収集家として鳴っていた人であり、その片丘村から望見出来る赤木山の名を取って文庫名とされた、貴重書・善本書物群を指す。氏は慶応義塾の予科教授を退職後一切職につくことなく、もっぱら室町時代物語・説経正本・古浄瑠璃正本、その他近世初期稀観本の収集に一生を捧げられた方である。

若い頃宮地直一博士の命で、『神道集』の諸本調査に当られて以来、その系統に属する上記の書物群の調査収集に従事され、『神道集』『室町時代氏物語集』『説経節正本集』『古浄瑠璃正本集』等々を翻刻出版されていった。

そしてその収集の労苦や裏話は、『書物搜索』二冊に達意の文章で綴られている。この氏の二大コレクションが、室町時代物語と古浄瑠璃の二分野のそれであった。私共が氏の没後、令夫人にお願いしてこの古浄瑠璃コレクション約100点の一括入手をはかったのである。令夫人は私共の重なる無理なお願いを、阪大こそこのコレクションの至当な収蔵場所とご理解頂き、お聞き届け頂いた御厚志を終生忘れることは出来ない。その令夫人も先生の跡を追われ今は亡い。

☆ ☆ ☆

これら諸文庫の演劇資料中の、貴重書中の稀本について以下に紹介してみたい。まず赤木文庫本の幾点かについて述べる。

灯台記(二冊) 本文庫中の最高の貴重書である。刊年の判る古浄瑠璃正本として現存最古(寛永10)であり、この期のものは殆どが改装されているのが通常であるが、元表紙が残り、上下二巻の原型もとどめている。さらにその挿絵が絵巻風の絵柄を示し、丹緑の彩色のある美本である。

丹緑本は古雅掬すものがあり珍重されるが、本文庫には他に、「ちうしやう」(大はし中将)、「こ大ぶ」(甘楽太夫)、「ふせや」、「たむら」と計5点を数える。この種古形の書は従来よりその書名が知られ、一種の「名物」扱いをされてきた優品であり、5点もの丹緑本コレクションは内外に誇り得るものである。

にしきど合戦(承応4) この書は江戸板の刊年の判明する古浄瑠璃本中最古の正本であり、「岡清兵衛重俊」の名が記され、作者名の残る最古の稀本である。またその挿絵が特異で注目されている。

ごわうのひめ(寛文13) 本作は「浄瑠璃御前物語」と共に浄瑠璃の創成期から語られた有名な作品であるが、本書はその現存最古の正本で注目されている。

松浦五郎景近(延宝6) 上に述べた、それぞれの分野で最古の貴重書群に匹敵する美本が本書である。原装の面影を今に伝え、表紙の題簽、朱色の脇方簽も完備して愛書家垂涎の書であるが、それよりもこの書が竹本義太夫が竹本座の旗揚げをする前に、京四条河原で清水理大夫の名で興行したその際の天下一本の書である点において名高い。脇方簽中央に「天王寺清水理大夫」と大書している。

この他、絵入浄瑠璃本の優品が揃うが、説経浄瑠璃の正本も多数集められており、中でも「さんせう太夫物語」は説経正本を読み物として大型にし、三冊(上は欠)本で売り出した江戸板の一種で、数少ない書の一つである。

松波少将通車(元禄4) 本文庫中ただ一冊の歌舞伎狂言本であるが、天下の孤本で京村山座上演の際の美本である。

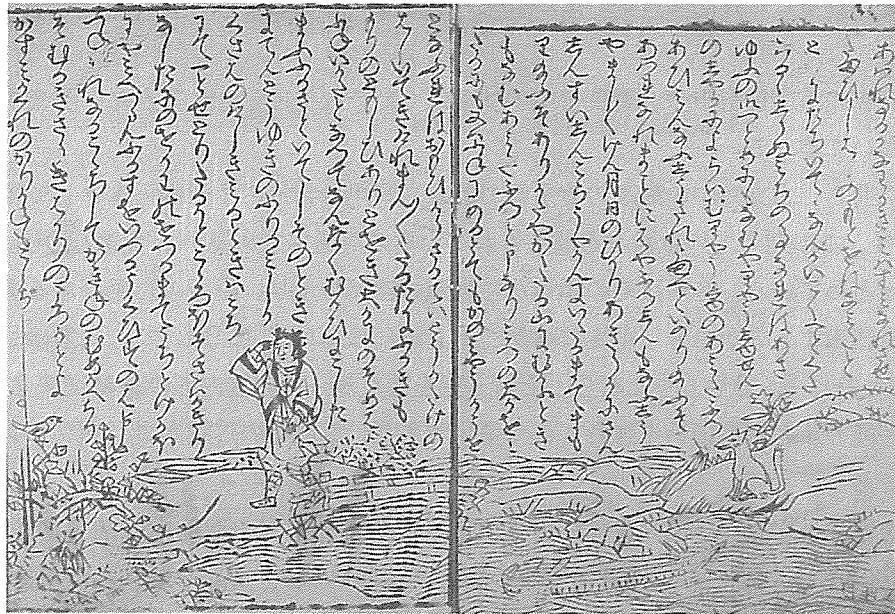
笹野文庫の中では「佐々木大鑑」が屈指の書で、献上本と呼ばれる大本の正本であり、近松の名が内題下に現れた最初の書としてよくこの書が浄瑠璃史などの図版を飾る。「遊女誠草」も「曾根崎心中」の後日譚として作られた珍しい書で、その見返しに夢物語である由来を記す序開き(導入部)の一葉が貼られ、この種のものには消失し易いだけに原姿を残して貴重である。

忍頂寺文庫には山本角太夫や義太夫の段物集(節事部を集めた一種の流行歌集)が多数残り、また一中節や河東節といった他流浄瑠璃の正本が多数存し、学会の注目を浴びている。

この他、高野辰之氏の出版された「日本歌謡史」や「近松歌舞伎狂言集」の原図アルバム、同氏書込の「近世邦楽年表」(三冊)なども中尾堅一郎氏の寄贈で研究室に所蔵されており、演劇研究者の来訪がしきりである。

以上、本学所蔵の特に浄瑠璃本を中心に紹介してきたが、さらにこの特色ある収蔵書を充実させ、

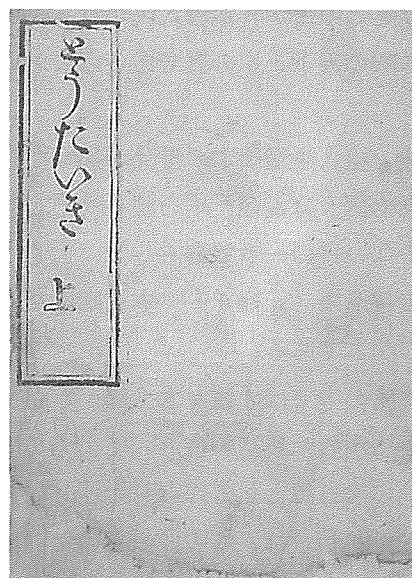
大阪の誇りでもあり、学界に裨益するところ大であるよう希望するものである。



とうだいき



松浦五郎景近



とうだいき

(しのだ じゅんいち 文学部文学科国文学講座担当教授)

第6回国立大学図書館協議会シンポジウム（西地区）に参加して

南谷 照子

標記シンポジウムが9月21日（火）～22日（水）の両日、金沢以西の49大学、1機関、総数66名の参加を以て神戸大学瀧川記念学術交流会館で開催された。参加の機会を得たので会の経過と感想を述べてみたい。

この会のメインテーマは平成4年4月から業務が開始されたNACSIS-ILLシステムの現状と課題で、ILLサービス開始後、この種のシンポジウムが開かれたのはかれが最初であり、また、私立大学の参加を求めたのがこの会の大きな特徴であった。

会は以下の5本の柱を立て進められた。

1. 基調報告 NACSIS-ILLサービスの現状と課題
2. テーマI（受付館、依頼館業務の諸問題）とテーマII（ローカルシステムの開発と運用）の事例報告
3. ILL業務を行っている私立大学図書館の特別事例報告
4. 特別講演 ILLサービスの展開と課題
5. 全体討議 ILLシステムの今後

1の基調報告では、学術情報センターの甲斐専門・電子情報係長から順調に複写件数が伸び続けている現況報告と運用上の問題点がいくつか挙げられた。費用の相殺は国立大学間では問題なく処理されているが、国公立大学間の料金処理システムの改善や、現在国立大学が実施している徴収猶予制度の見直しについて、学術情報センターからだけでなく、大学側からも文部省に強く申し入れるよう要望があった。また、学術情報センターでは、ILLシステムの利用者の拡大を8月から実施し、将来は、国立国会図書館や日本科学技術情報センター（JICST）にも接続したいとのことであった。{注 11月1日から学術情報センター（NACSIS）とJICSTとの間でゲートウェイ接続を行い、NACSISを経由してJOISを利用できるようになった}

また、国内に所蔵のない資料については、学術情報センターに取り込んだ分を翌日1日分をまとめて英国のBLDSC（British Library Document Supply Centre）へ複写の申し込みをするシステムを開発し、平成6年4月から実施する予定であること、現在14機関が利用していると言われるNACSIS-IRからのILL申込機能についても少し触れられた。外国のデータベースからは、若干のものを除いて、ILLの申込は著作権の関係で現時点では不可能であることが判明したが、学術情報センターの今後の対応が大きく期待されることである。

2のテーマ別の事例報告では、ILLシステム導入後の各館の現状報告と今後の対応等が発表された。どこの館もILLシステム導入後複写の受付が目立って増加したことが挙げられ、その対応に追われているのが現状であり、申込ルールの確立が強く要望された。テーマIIのILLローカルシステムの開発については、既に実施している館では、夫々事情が異なるので、今後ILLシステムを導入する大学には大いに参考になったことと思う。

また、金沢大学から教官にアンケート調査を行った上で、NACSIS-IRからのILL申込機能の問題点として、現在実施している館の唯一の報告であったが、研究者が自館の所蔵を確認せずに複写の申し込みをするという問題だけでなく、NACSISが提供する全てのデータベースから利用できるのであれば、現在の段階では、利用者にもあまりメリットがないように思われる。

3の私立大学からの特別報告は、ILLシステムの最初からの参加館である関西学院大学図書館

から、導入の経過と運用状況が説明され、自館の事情だけでなく、私立大学全体で人員削減化が進んでいる図書館事情にも触れ、また、経営母体が異なることから足並みを揃えることの難しさが強調された。国立大学に対しては、現時点での大学別に申請を必要とする文献複写料金徴収猶予制度の改善を、全体としては、将来、センター館を設立して、国公私立大学共通の一括精算処理方式が可能となるように継続課題として検討して行く必要性が強調された。

4の「ILLサービスの展開と課題」の図書館情報大学の石井助教授の特別講演では、学術情報センターの成り立ちの説明から、最後の開発であった端緒についたばかりのILLシステムについて、今後導入が予想される学内LANが進む環境下でのDocument Delivery Serviceや、将来資源共有化が進む中での展開と今後の課題について、論理的な話題が提供された。また、現在実施されているILLサービスとは何か、利用者にもっとPRするために、利用者とのコミュニケーションをはかる必要性を強調された。日常業務に追われて気が付いていない事が多くあることを改めて考えさせられた。

最後に全体討議が行われ、まとめとして、

1. 大幅に相互利用が増加していること
2. 今後の展開のための運用ルールの確立
3. 規模に応じた役割分担
4. 依頼先を分散化する
5. 所蔵データのup-to-dateをはかる
6. 利用者の理解とPRをはかる

以上の6点が確認され、ILLシステム専門委員会に報告されることになった。

欲を言えば、ILLシステム専門委員会の委員に実務者の生の声を聞いてほしかったこと、ILL問題は西も東もないので、全国規模で意見交換をした方が相互利用をする上でより効果があったのではないかと思った。

最後に、参加者に諸々のご配慮をいただき、また、初日の夜、眼下に神戸の素晴らしい夜景を眺めながら参加者の交歓の場を設けて下さった神戸大学附属図書館の皆様にお礼を申し上げます。

(みなみに てるこ 情報サービス課参考調査掛長)

平成5年度 NACSIS-IR 地域講習会に参加して

高野 恵子

さる10月7日、8日の両日、阪大大型計算機センターにおいて平成5年度のNACSIS-IR地域講習会がおこなわれた。学術情報センターより米沢誠、木村優両掛長を講師に迎え、ひろく西日本地域から19名の受講生が集まったのだが、その内の1人として参加する機会を得た。尚、阪大図書館からは、本館参考調査掛の南谷掛長と吹田分館資料運用掛の高山掛員も参加している。講習は、情報検索開始までの手順→検索の基本コマンドの使い方→実際の検索問題の実習という順に進められ、このうち多くの時間が実習に当てられた。受講者各自に検索用端末が常時1台割り当てられ、実際に端末を操作し検索をしてみるということを重視した講習であった。

NACSIS-IRとは学術情報センターが提供するデータベースをオンラインで検索するシステムで

ある。このシステムには、図書館からではなくとも、国立大学の教員及び大学院生に接続利用資格があり、またパソコン等から手軽に接続できるようになっている。したがって、今回講習を受けてこのシステムの特徴と思われた点を中心に簡単に紹介してみたい。

• データベースについて

このシステムで提供されているデータベースは、現在約 40 種類である。これを内容からみると、研究情報データベースと呼ばれているものと、目録データベースとに大別できる。研究情報データベースは、雑誌に掲載された論文や学会における研究発表など、様々な研究成果についての情報を集めたものである。標題、著者名、収録誌名等の基本的項目からなる索引型と、それに抄録が加えられた抄録型、さらに論文全体も収録された全文型がある。あるテーマに関する研究を探す、研究の詳しい内容を調べる、その研究者や掲載雑誌を知るといったことに使える。一方、目録データベースのほうは図書や雑誌の情報を集めたものである。図書・雑誌の詳しい書誌情報や所蔵館情報、また、あるテーマに関してどのような図書や雑誌があるかといったことに利用できる。この 2 種類以外にも、法令全文を収録したもの、研究者や大学等で作成されたデータベースのディレクトリ、幕末維新史の史料や木簡の積文等のデータベースもある。

これらのデータベースの中には SCISEARCH や COMPENDEX-PLUS 等のように他のオンラインサービスにもあるものもあるが、学術情報センターによるものが多くある。そのなかには研究者提供のデータベースもあり、その分野の専門的な情報を得ることができる。また、例えば文部省科研費研究の成果報告概要や日本の大学で授与された博士論文の索引、幾つかの学会での研究発表の概要など独自の内容で、また普段探しにくい性格の情報を集めたデータベースがあることも注目される。

但し、データベースを選ぶ際には、それが対象とする分野はなにか、収録機関は何年以降かといったことを見極めることが重要である。NACSIS-IR のデータベースは全分野を対象としたものばかりではないし、収録期間は比較的最近のものに限られている場合が多いからである。尚、詳しくは「NACSIS-IR 総合マニュアル」を参照されたい。(図書館にあります。)

• 料金について

NACSIS-IR 利用料金は以下の表の通りとなっている。A、B の経費区分はデータベースによって違うが、B になるのは、目録情報データベース類や学会スケジュール等である。利用料金は他のオンラインサービスに比べて安いと思われる。

経費区分	接 続 料	ヒ ッ ト 料
A	各データベースに接続している時間に対して 50 円/分	検索された文献について、その書誌情報あるいは抄録等を端末に出力した件数に対して 13 円/件
	ファクシミリ出力した枚数に対して(ただし、海外にはサービスしていません)	34 円/件
B	各データベースを呼び出す都度 30 円/回	—————

• NACSIS-ILL との関連について

NACSIS-IR で検索を行い得られた情報のなかから論文等をえらんでその場で複写・現物貸借申し込みが可能であることも大きな特徴の 1 つである。検索をしていて必要とする文献があれば、REQUEST コマンドを発行するだけでそのデータが、NACSIS-ILL におくられる。NACSIS-ILL とは現在図書館で他大学図書館へ複写・現物貸借申し込み時に使うシステムである。現在は阪大はまだこの REQUEST コマンドの使用は行っておらず、全国でもこのサービスは数大学でしか

なされていないらしいが、将来的に期待される機能であろう。

(たかの けいこ 生命科学分館参考調査掛)

教官著作寄贈図書

一本館

溝口 宏平(教・助教授)
超越と解釈
溝口 宏平著
(晃洋書房 1992)

山形 頼洋(文・教授)
感情の自然
山形 頼洋著
(法政大学出版局 1993)

増原 宏(基礎工・教授)
マイクロ化学—微小空間の反応を操る—
増原極微変換プロジェクト編
増原 宏他著
(化学同人 1993)

池田 和義(工・名誉教授)
Poems on the hearts of creation
-in the seven-and-five-syllable metre-
Kazuyosi Ikeda
(The Pentland Press 1993)

小森田 精子(教・助教授)
暮らしに生かそうサイエンス
小森田 精子著
(新日本出版社 1993)

—生命科学分館—

吉矢 生人(医・教授)
生理学の夜明け
—血液ガスと酸塩基平衡の歴史—
ポール アストラップ、ジョン セバリ
ングハウス著
吉矢 生人、森 隆比古 訳
(真興交易医書出版部 1992)

—吹田分館—

西尾章治郎(工・教授)
オブジェクト指向コンピューティング I
(レクチャーノート/ソフトウェア学 4)
西尾章治郎他編
(近代科学社 1993)

横山 正明(工・教授)
科学技術の最前線—「日本の頭脳」を現場
に追う— XIV
三田出版界編
対談者 横山 正明 他
(ダイヤモンド社 1993)

西原 浩(工・教授)
光集積回路 改訂増補版
西原 浩他著
(オーム社 1993)

池田 和義(工・名誉教授)
Poems on the hearts of creation
-in the seven-and-five-syllable metre-
Kazuyosi Ikeda
(The Pentland Press 1993)

増原 宏(工・教授)
マイクロ化学—微小空間の反応を操る—
増原極微変換プロジェクト編
増原 宏他著
(化学同人 1993)

大森 明(溶研・助教授)
Plasma spraying : theory and
applications.
R. Suryanarayanan (ed.)
大森 明他著
(World Scientific 1993)

川谷 充郎（工・助教授）
 橋梁振動の計測と解析
 橋梁振動研究会編 川谷 充郎他著
 （技報堂 1993）

奥山 格（基礎工・助教授）
 Reviews on heteroatom chemistry.
 Vol. 4-9
 Shigeru Oae (ed.) Associate editor,
 Tadashi Okuyama, et al.
 （MYU 1991-1993）

—基礎工学部図書室—

奥山 格（基礎工・助教授）
 パイン有機科学 I, II
 S. H. Pine 著 奥山 格他訳
 （廣川書店 1989）

■■■■■ 会 議 ■■■■■

分館長会議

5. 11. 29（月）10：00～12：30（本館会議室）

1. 土曜開館について協議した。
2. 本館新築計画について協議した。
3. 外国雑誌の購入方法について協議した。
4. 教養部の改組に伴う諸規定の改正について協議した。

■■■■■ お知らせ ■■■■■

平成5年度購入の特別図書（人文・社会系）について

平成5年10月4日開催の豊中地区図書選定小委員会において、平成5年度の特別図書（人文・社会系）の選定について協議の結果、以下の資料が購入されることとなりました。

1. 近代中国史料叢刊 正編 第43-100輯 693冊 第1-42輯は本館書庫所蔵
2. 岩倉具視関係文書 マイクロフィルム 65リール
3. 昭和財政史資料（大蔵省財政史室編）マイクロフィルム 312リール 索引簿2冊
2年計画で購入
4. プロバンス文学コレクション（岡山大学名誉教授故杉富士雄氏旧蔵書）

特別図書（人文・社会系）の予算は、人文・社会科学系の研究科を置く大学院における教育・研究に必要な基本的資料を整備・充実することを目的に、毎年文部省から配分されるものです。

本学では、関連部局からの推薦資料をもとに、豊中地区図書選定小委員会が上記趣旨に則り、部局等の予算で購入することが困難な高額の本学未所蔵資料を選定し、本館書庫に蔵置することとしております。年度末には入荷し、利用できる見込みですので、せいぜい御利用下さい。

（情報管理課図書受入掛）

|||||| 日 誌 ||||||

5. 9. 2 図書館情報システム特別委員会 ILL 専門委員会 (生命科学分館)
5. 9. 20 学術情報センター総合目録委員会 (学術情報センター)
5. 10. 7 日本医学図書館協会理事会 (東京大学)
5. 10. 7~8 NACSIS-IR 講習会 (地域講習会) (大型計算機センター)
5. 10. 26 国立大学図書館協議会文献複写に係わる著作権問題特別委員会
国立大学図書館協議会図書館情報システム特別委員会
国立大学図書館協議会常務理事会 (大阪ガーデンパレス)
5. 10. 27 国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会
国立大学図書館協議会理事会 (大阪ガーデンパレス)
5. 11. 4 図書館情報システム特別委員会 ILL システム専門委員会 (生命科学分館)
5. 11. 9~12 文部省並びに大阪大学附属図書館主催大学図書館職員講習会 (吹田分館)
5. 11. 25 国立七大学附属図書館事務部課長会議 (福岡市)
5. 11. 26 国立七大学附属図書館協議会 (福岡市)
5. 11. 29 分館長会議 (本館)